

DD NEWSLETTER

NO. 2

May 28, 1983

The Center for Southeast Asian Studies

Kyoto University

[2 - 1] D D 研究の狙うもの

福井 捷朗

去る3月末の中間報告検討会において明らかになったように、これまでのD D研究においてはデータの蓄積が優先し、その分析が進んでいない。その理由としては、データの量の龐大さ、集計に必要な時間の制約など技術的問題もさることながら、より根本的な理由としては、分析の視点、換言すれば研究全体の狙いが参加者一同の共通認識となっていないことにあると思われる。このような事態の責任は私の怠慢にあることは明らかであるので、遅ばせながらD D研究全体としての狙いとして皆様に御賛同頂け、なおかつ、今後の分析と第2次調査計画の指針となりうると私が考えるものを以下に記しますので御高配頂き、活発な議論の叩台となれば幸いです。

周縁地域における農村の展開と開発

——— 東北タイにおける村落研究から ———

第1章 東北タイとドンデング村の周縁的性格

——— 二重の意味での周縁性：メコン本流沿を核心地域とするラーオ社会から見た「コーラート高原」の周縁性

——— ラーオ社会の周縁地域への外延的拡大の過程の

事例研究としてのDD村調査

- バンコクを中心とする国家形成が周縁地域に波及する過程の事例研究としてのDD村調査
- 前者は、人口増を根本的原因とし、spontaneousなpioneer peasantsのrural-rural migrationが総じて自給自足的経済条件のもとで進行した過程の事例研究を意味する。
- 後者は、行政、インフラストラクチャー、技術、市場経済、都市化などが周縁地域に波及する過程の事例研究を意味する。
- 上記ふたつの過程の同時共存
- DD村調査データを上記ふたつの過程に分解して分析する。（ふたつの過程の合成が調査時点における実態であると仮定する）
- つまり近代化の影響を受ける以前の状態を静的伝統的社会と見ないで、それなりの論理をもつ動的社會と見る。そのような進行形社会にさらに他の外的要因が付加して、今日の状態が出現していると見る。
- 村開発の視点から見れば、近代的技術や資材の導入による生産の変容をほとんど受けていない取残された地域——いわゆる農村開発による所得・地域格差問題——の事例研究である。

第2章 学際的協同による村落調査の方法

- DD村 概要説明
- DD村調査の方法論の概要
- 個別調査の説明

[第 I 部 外延的拡大]

第 3 章 ラーオ社会の「コーラート高原」への拡大

—— 歴史的概観 ——

- 1 コーラート高原の先住者達
- 2 ラーオ社会の核心域
- 3 コーラート高原への拡大

第 4 章 コーラート高原の自然と農業

—— コーラート高原が農業立地的に、あるいは農業的にいかに marginal であるかを示すこと。

- 1 地形と土壌
 - 大地形的に見てアジア稲作圏において特異的であること
 - 土壌肥沃度
 - 土壌保水性
- 2 気候と水文
 - 降雨の域内変異解析
 - 地形・土壌・降雨を総合して水文的特徴を明らかにすること
 - 水文条件の不安定性を強調すること

(旱魃と洪水)

3 農業の展開

- ラーオ社会進出前の農業
- ラーオ人進出のパターンと立地条件
- 米生産の不安定性
- 畜産(?)

第5章 村落開拓小史

- 以下の各章の前提となるような開拓史の概要
- 新しい変化については第II部で。ここでは、定着の過程、自給自足経済の状況化にあった時代を取扱う。

第6章 村の自然と農業

- 自然環境的 marginality とくに自給自足経済下における生存にとっての自然条件の marginality
- 村域内土地利用拡大の方向と生産力の変化(不安定性の増大)、あるいは村域内におけるより marginal な空間への外延的拡大の過程
 - 1 地形と土壌
 - 2 気候と水文
 - 3 水田の拡大と生産性
 - 4 米以外の農業と採集
 - 5 凶作年の対応

第 7 章 村の人口動態

- (1) 米生産にほとんど依存する自給自足的
経済下における人口扶養力の限界の推
定
- (2) 人口扶養力にとっての外部要因の効果
の推定
- 以上、(1)、(2)の解析の前提と
しての人口動態分析
- 開拓以来の人口増加の推計
- 増加の原因解析 (出生率、死亡率、移出、移
入率の変化)
- 移出・移入の様態解析 (婚出、婚入、rural-ru
ral, rural-urban)

第 8 章 米経済のバランス

- 自給米生産を主とする経済に於て土地と人口の
バランスはどうなっていたか
- 外延的拡大の速度と限界を規定するものとして
の人口と土地生産力
- 人口と土地生産性のバランスに生産の不安定性
がどのように、どの程度、関与するのか
- 1 米生産の土地生産性
- 2 米生産の労働生産性
- 3 水田の所有、相続、売買、貸借に見る人口・
生産バランスと生産不安定性

- 4 DD村における水田の外延的拡大と人口動態
- 5 東北タイにおける外延的拡大と人口増加

第9章 村の社会構造

——社会構造が外延的拡大の過程とどのように対応しているか

- 1 親族組織の基本構造
- 2 村落組織の基本構造
- 3 家族周期と水田農業
- 4 初期開拓集団と村落組織
- 5 互助と生存

第10章 村の生活と文化の基本構造

——外延的拡大期における生活と文化がどのようなものであったか

——それは、そのような人類生態学的条件とどのように対応するのか、また、生存にとっていかなる機能を果たしたか

- 1 住環境
- 2 食文化
- 3 生活空間
- 4 生活時間
- 5 宗教と儀礼
- 6 価値観

〔第Ⅱ部 外的要因に対する周縁地域の反応〕

第 1 1 章 「コーラート高原」から「東北タイ」へ

—— 歴史的概観 ——

- 1 チャクリ改革前のタイ社会とラーオ社会
- 2 ラーオ社会核心域からの断絶
- 3 「コンケン」以後
- 4 二重の意味の周縁性の共存

第 1 2 章 村の変貌史

—— 村の変貌を外部要因との関連で概観する。

—— これに続く章の前提

第 1 3 章 農業の反応

—— 東北タイ全体としての農業の構造変化

—— 村の農業において外部要因の変化に対してどのような変化が起ったか、あるいは起らなかったか。

—— 村全体としての農業の変化と外部要因との関連の分析

—— 村内世帯別変異の分析による外部要因に対する反応の機作の分析

- 1 ケナフとキャサバ
- 2 野菜
- 3 稲作

4 畜産

第 1 4 章 非農業収入の増大

- 道路、都市化、雇傭機会の増大によって村人の職業の多様化がどのように起ったか（土地所有との関連、家族構成との関係、etc）
- 機会に対する反応の村内変異は何によって説明されうるのか。

第 1 5 章 村経済の変貌

- 野菜、畑作、農外収入によって、村の経済構造がどう変ったか
- 村全体として
- 家族単位で
- 消費のパターンと収入高、収入源の関係
- 自給米生産と市場経済の同時共存の意味するものの
- 兼業農家化が進行しつつあるか

第 1 6 章 村の人口動態の変質

- 自給自足経済下において人口扶養力で規制されていた村人口が農業、経済構造の変化に伴っていかなる質的変換を遂げたのか

第 1 7 章 村社会の変容

- 変化かい
- 経済構造の[^]もたらしたものは何か？
 - 従来の親族・村社会組織にどのような影響を与えたか
 - 旧組織の崩壊
 - 意味の喪失
 - 新しい機能の付加
 - まったく新しい組織の形成

第 18 章 村の生活と文化における変化

- 農業、経済の変化、情報量の増加などが日常生活と文化にどのような影響を与えつつあるか
- それらの分析を通じて、村人の意識構造、価値観がどう変りつつあるのか
 - 1 住環境
 - 2 食文化
 - 3 生活空間
 - 4 生活時間
 - 5 宗教と儀礼
 - 6 価値観

[第 III 部 周縁地域の農村開発]

第 19 章 資源

- 村の開発がありうるとすれば、どの資源のより有効な利用が考えられるのか

—— 水と労働力（時間）にしか望みがない？

1 資源として何があるか

2 水資源（天水の利用効率の向上の可能性）

3 労働力（時間） —— 農業、非農業において

第 2 0 章 農業開発の可能性

—— 水、労働力の有効利用による農業の集約化、生産性の向上が望みうるか

—— 米の商品作物化の条件（米質、社会保障としての米作の意味、不安定性の限界）

—— 野菜の将来性

—— 畜産の将来性

—— 畑作の将来性（土壌劣化）

—— 農業開発の限界

第 2 1 章 非農業生産拡大の可能性

—— 在村を前提とした非農業による労働力有効利用の可能性の限界

第 2 2 章 村経済と人口動態の見通し

—— 農業生産における専門化が進行するか

—— 兼業農家の増大の可能性

—— 離農・離村と在村人口の見通し

第 2 3 章 村の将来像

—— 農業、非農業、人口の見通しを踏まえた上で、

村の社会、生活、文化が将来どうなるか？

—— marginality は解消するのか？

以上

1 9 8 3 年 5 月 2 5 日